

道家思想の原初的宇宙生成論

—新出土資料から得られた新知見を中心として—

論文審査の結果の要旨

上記の論文は、近年、陸続と発見される新出土資料から得られた新知見に基づき、先秦道家思想の宇宙生成論に対する新たな解釈を行い、中国思想史における位置づけを試みるものである。

従来の研究では、道家思想の宇宙生成論は『老子』を起源とし、「道」が宇宙生成論の絶対的根源者であるとされていた。しかし本論文の提出者が新出土資料をもとに考察を進めた結果、「道」は道家思想において当初より絶対的な根源者であったのではなく、「道」の上位概念に「無状の状」（形無き形）や「自然」（本質的なあり方）が存在していたり、或いは「道」を中心としない宇宙生成論が併行して存在したりしていたのであり、その後、『老子』等において「道」は他学派への優越性や絶対的規範、強制力・拘束力といった性格を持ち、また「道」を根源としない生成論を取り込んでいく過程を経て、「道」は道家思想における根源者として、その絶対化が図られたことが解明された。

本論文の達成した成果は次の三点である。第一に、郭店楚簡の埋葬年代を巡る盛んな議論を踏まえ、独自に『史記』や『戦国策』といった史料、また考古学による研究成果を再検討し、郭店楚墓には、楚文化以外の要素が積極的に見いだせず、その造営年代は江陵地区の墳墓で秦楚の文化的融合が始まる紀元前二六〇年を大きく下回ることがなく、郭店楚簡の抄写年代は戦国時代中期あたり、とする点である。

第二に、『老子』が「道」を根源者としながら二五章では「道は自然に法る」と言明するという矛盾を、通行本『老子』と郭店楚簡の「道」を巡る記述の違いに基づいて検証を進めた結果、原初的道家思想において「道」は本初の状態である「無状の状」や「自然」の名であり、「自然」は「道」の上位概念であったと解釈することによって解決した点である。後世の道家は「道」を絶対者としようとして字句を改竄したため、「道は自然に法る」を合理的に解釈できなくなったとの指摘はきわめて重要である。

三点目は、伝世文献にはない宇宙生成論が展開される郭店楚簡『太一生水』と上博楚簡『互先』の内容を検討して思想史的位置づけを行い、また「道」概念の成立について考察した点である。本論文は、『太一生水』は郭店楚簡『老子』二五章との類似性をもとに考察を進め、結果的に『太一生水』が郭店楚簡『老子』二五章を下敷きにしていると考え、また郭店楚簡『太一生水』に見られる「太一」を根源とし「水」を媒介として万物を生ずる生成論は、郭店楚簡『老子』二五章の循環論を具体的に説明したものと結論付ける。

新出土の資料を用いての研究は画期的な発見が期待されると同時にさまざまな問題があり、研究上往々にして困難を伴うが、本論文は慎重な手順を踏んで研究を進めており、新知見が比較的高い信頼性をもって研究に生かされている。今後とも着実な研究のさらなる発展を俟つところである。

以上のことから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。